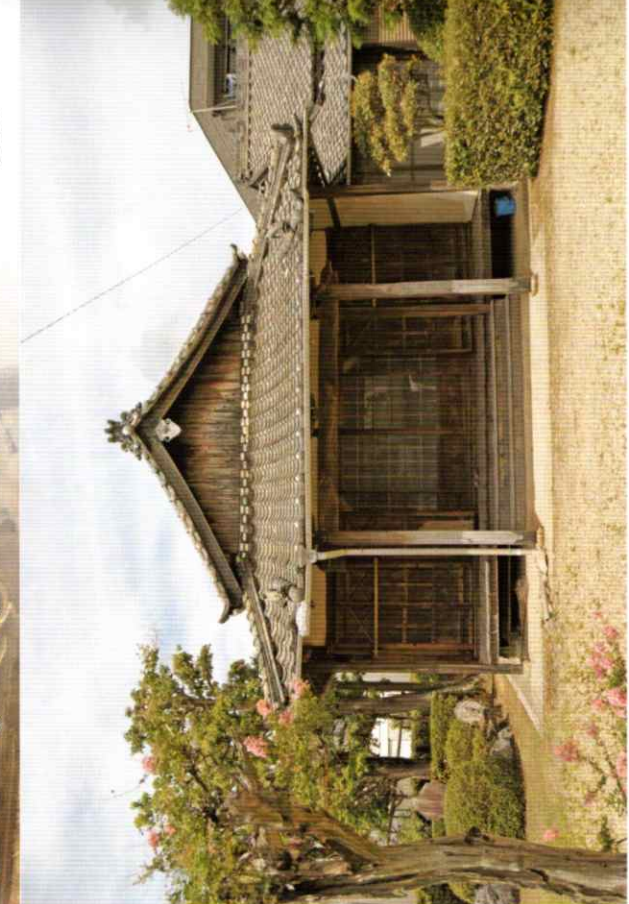


双樹寺本堂 (緑町)

切妻造
構造様式：檼瓦葺
妻入

本樂寺本堂 (赤松町)

奇棟造
構造様式：桷瓦葺
平入



雙樹寺は浄土宗の寺院です。明治13年(1880)以降に始まった明治用水中井筋沿いの新田が開拓され、移住者が増えていくなか、尼僧による説教所として創建されたといわれます。建物は、本格的な浄土宗本堂の建築様式とは異なった造りをみせています。間口は狭く、内陣の奥行は極めて深い造りをしています。脇の間は簡略な扱いで、位牌の間もなく、浄土宗の古い形式が保たれています。

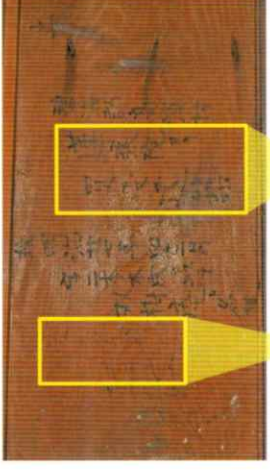


来迎柱上の飾り

本堂正面



本堂平面図



上
碧海郡高濱村
蓮乗院買受建築
明治廿七年十二月
宇二本木成芳以テ
双樹庵ト名
安永九年
十二月廿日
大工棟梁
尾六

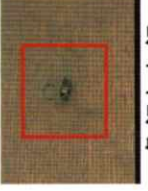
仏壇腰板裏の墨書板



内観

脇仏壇では腰板裏に書かれた墨書の板が発見され、明治27年(1894)に現在の高浜市春日町の蓮乗院本堂から買い受けて移築されたことが記されています。さらに、移築前の旧蓮乗院本堂が安永9年(1780)に建立されたこととあり、虹梁や斗拱などの様式からもこの頃の建築とみて差し支えありません。また、内法長押には角釘(和釘)と丸釘(洋釘)が両方用いられていることから、安永創建時の角釘を残したまま、明治移築時に丸釘を併用して長押が打たれたことが分かり、移築再建されたことを明確に示しています。

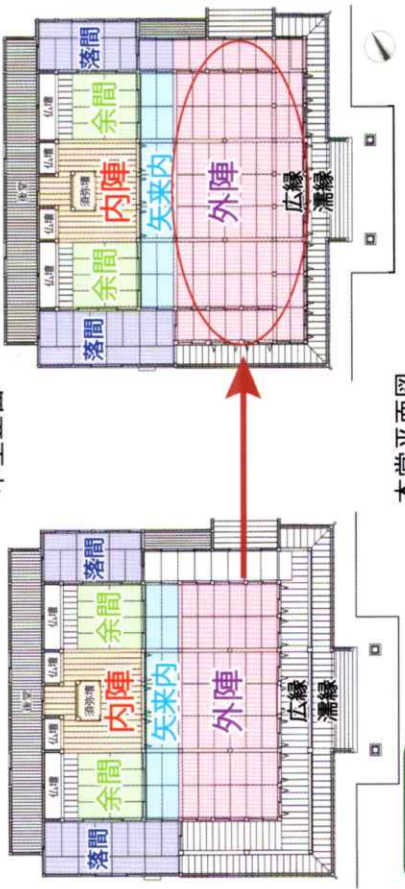
内陣の中に四本の円柱をあしらい、外陣・内陣ともに虹梁を多用しており、堂そのものは簡素な割に華やかな部分も見えます。内陣内に四天柱を設ける点は、阿弥陀堂の雰囲気をよく留めており古式といえます。移築の際にも大きな改造は見られず、18世紀後期の浄土宗の説教所建築としては、この地域で他に類例が無く、貴重な本堂といえます。



角釘と丸釘

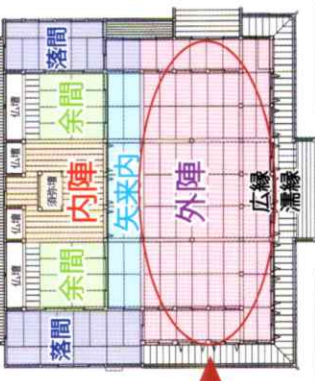


本堂正面



本堂復原図

本堂平面図



山本金四郎は、篠八幡宮を造営した榎本清兵衛と同じく、横松村出身です。その地は近世以降、優れた堂宮大工を輩出した地として知られます。山本家は年代的に、貞之一貞次一貞敏の順に出てきます。

本堂の留蓋瓦

本楽寺本堂には、建立年次と大工棟梁が分かる墨書や棟札があったとされます。大工棟梁は知多郡横松村(現在の阿久比町)の山本金四郎貞之で、本楽寺のほかにも明法寺や西方寺など、18世紀末の安城において多くの本堂建築を手掛けていることが知られます。いづれも本堂は間口長さ9間、奥行長さ8間と比較的大型で、正面の三方に広縁をつけます。これは真宗本堂が大型化へ向かう傾向を示す初期の遺構と位置づけられます。

棟梁の山本金四郎の作風でもある、虹梁や柱、中備に彫刻を多く施した装飾的な意匠がみられます。本堂

山門



山門は、本堂を正面に東側を向いて建つ四脚門です。屋根の留蓋瓦に天保14年(1843)の銘があり、この頃の建立であると考えられます。江戸時代末期の特徴をよく残しています。

鐘楼

明治33年(1900)に建立された鐘楼は、境内の南東隅にあり、切石積み基壇上に建っています。榎宗様でまとめられた鐘楼で、斗拱や彫刻も多く、華やかです。



天保十四年

山門の留蓋瓦背面



本楽寺は山号を松誉山といい、真宗大谷派の寺院です。桜井城主松平信定が創建あるいは再興して本楽寺としたといわれます。永禄年間(1558～1569)三河一向一揆の際に遠州相良(現在の静岡県牧ノ原市)へ転地しましたが、再び現在の場所に移転しました。この時、赤松村の安藤八左門が剃髪して慶順と名乗り、本楽寺の住職となりました。「本楽寺由緒」では、寛永7年(1630)に建立されたとありますが、現本堂の建立に関しては、棟木に寛政10年(1798)の再建と記されていたとされます。

山門

山本金四郎は、篠八幡宮を造営した榎本清兵衛と同じく、横松村出身です。その地は近世以降、優れた堂宮大工を輩出した地として知られます。山本家は年代的に、貞之一貞次一貞敏の順に出てきます。



本堂の留蓋瓦



妖獣・蟹

斗拱



鐘楼の獅子鼻

正法寺本堂 (山崎町)

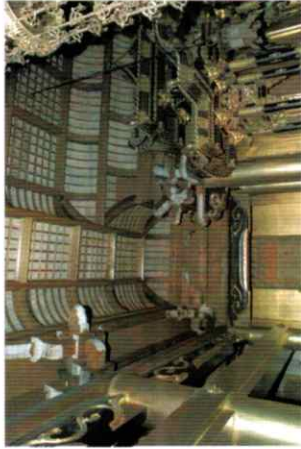
入母屋造
寄棟造
構造様式：檼瓦葺
平入



本堂正面

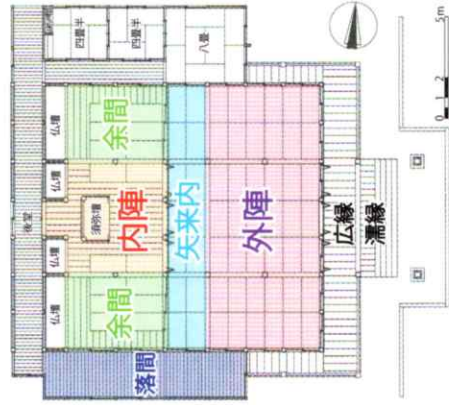
正法寺は山号を雲松山といい、真宗大谷派の寺院です。創建や由緒については、はっきりとわかっていませんが、現在の建物は、境内にある崇徳院釋義順の墓石に「明治19年より3年にして工を竣る」と記されており、明治22年(1889)に竣工したことが知られます。また、本堂を造営した大工棟梁は、明知村(現在のみよし市明知町)の小野田又蔵です。

正法寺本堂は明治24年(1891)、又蔵37才の時の作品であると造営記録が残されていることから、着工より完成するまで、5年はかかったと考えられます。



二重折上小組格天井

四角に木を組み作った天井のこぎり状の縁にさらに格子形を取り付けているものを小組と云います。写真(上)は天井を二重に折上げています。



本堂平面図

本堂の外陣周りは柱間を1間とし、斗栱も用いておらず古い形式です。しかし、虹梁は外陣内および内陣側面、仏壇正面などに比較的多く使用されています。欄間の高肉彫りや板支輪の彫刻、二重折上小組格天井なども手が込んでいます。注目されるのは内陣・余間周りの柱を建て登せ柱とする点で、内陣周りでは、粽を付けた円柱に見せて、台輪を通して、台輪を通すなど入念です。

また、庫裏に近い北側に書院座敷を附属する点も特徴の一つです。正法寺は、棟梁・小野田又蔵の初期の頃の作品で、その作風や系譜を知っていく上で大変貴重です。



山門 (薬医門)

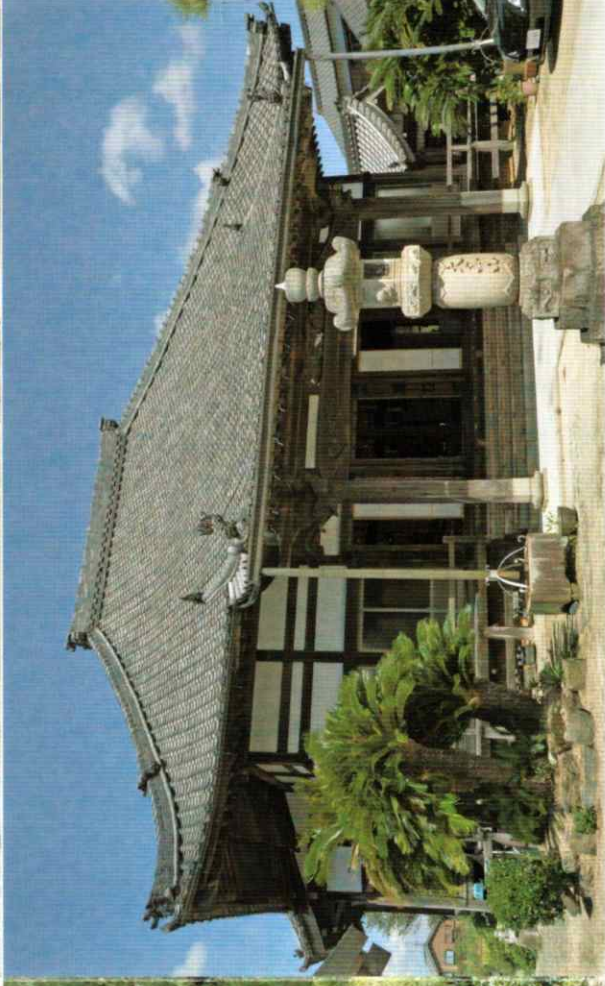
薬医門

正法寺の山門は、薬医門と呼ばれる本柱と控え柱が2本ずつ、屋根が切妻破風造などの特徴を持つ門です。棟札によって文政11年(1828)の上棟であることがわかりました。また、留蓋瓦には天保14年(1843)の簾書きもあり、この頃に完成したものとみられます。東側を向いて建つ一間の薬医門で、柱は長方形断面の五平柱で、礎石の上に立ちます。頭貫虹梁の端に木鼻を付けないなど華やかさはありませんが、堅実で姿整った門です。

正法寺山門 棟札

貞印寺本堂 (高求町)

入母屋造
寄棟造
構造様式：檼瓦葺
平入



本堂正面



内陣の虹梁と欄間彫刻



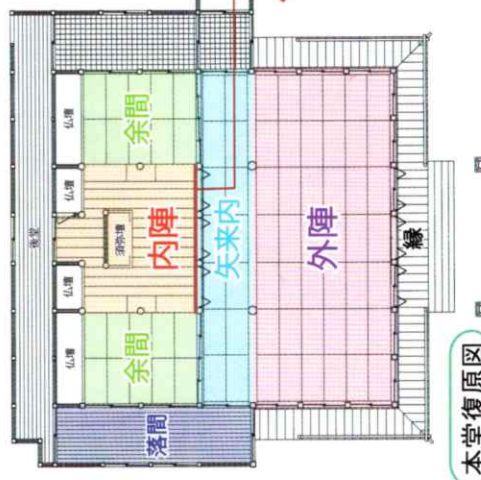
薬医門の組物

柱の上には出組や斗栱・彫刻された木鼻がみられます。

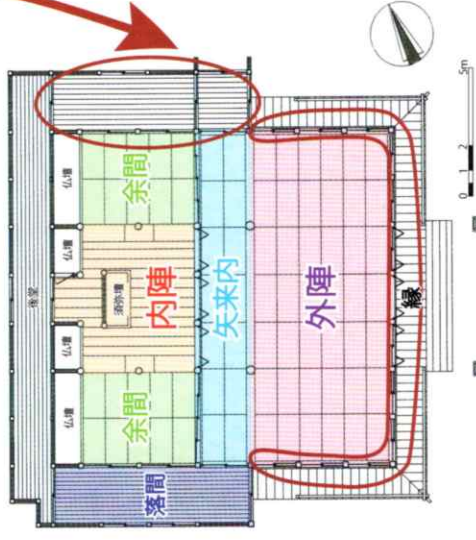


鐘楼見上げ

鐘楼は三河地震倒壊のため、昭和24年(1949)の再建です。



本堂復原図



本堂平面図

明治中期以降、長年の歳月をかけて完成されたものと考えられます。こうして造られた中規模の真宗本堂は、矢来内正面や外陣内に大虹梁を用い、内陣周りの円柱には建て登せ柱を使うなどの特徴がみられます。余間正面や内陣内では、極彩色の彩画や金箔などで荘厳※が施されています。

高田派本堂特有の平面形式や意匠の特徴は見受けられませんが、市内における数少ない真宗高田派寺院の本堂です。

※荘厳とは、仏像・仏堂の天井や周りを飾ることです。

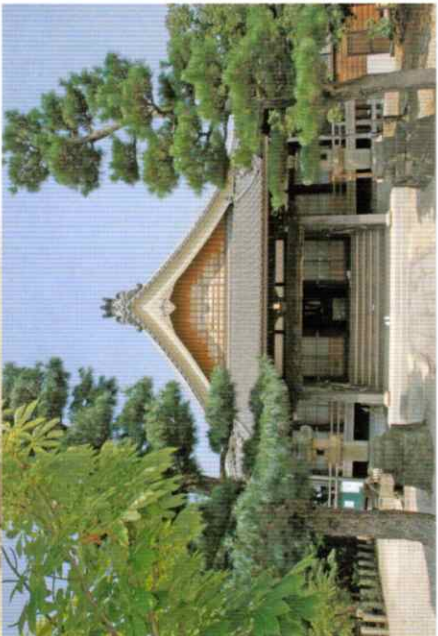
貞印寺は山号を大高山玄覺院といい、真宗高田派の寺院です。

開山や開祖ははっきりとしていませんが、寺伝では創建が養老2年(718)と伝わります。もとは大岡白山宮の別名で天台宗のお寺でしたが、文和元年(1352)大岡の郷主であった定胤が浄土の仏門に出家し、その後、玄覺院を貞胤坊に改称して真宗へと発展していきしました。

第4代の住持・印立の時に徳川家康公により寺領の黒印を拝領し、このときに定胤の文字を貞印に改め、坊を寺として貞印寺となりました。

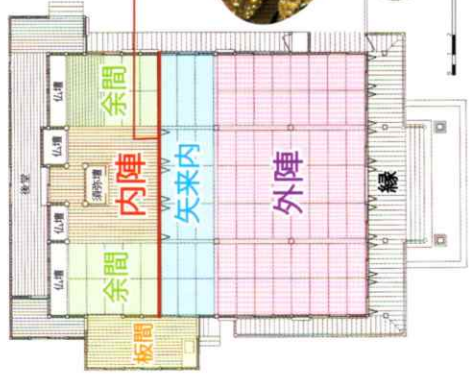
西岸寺本堂 (福釜町)

入母屋造
さんかくわらわさき
構造様式：棧瓦葺
つまいり



本堂正面

西岸寺は山号を松林山清秀院といい、真宗大谷派の寺院です。本堂は、寛政7年（1795）に山本金四郎貞之によって建立されたものが昭和20年（1945）の三河地震で倒壊し、昭和25年（1950）に仮本堂として再建されたものです。矢来内正面の柱間の虹梁やその上の臺股と彫刻、余間仏壇正面の虹梁は、江戸時代後期の様式を示し、寛政7年建立の前本堂の部材を再利用したものと考えられます。そのため、内陣・余間の間口の開口も前本堂の規模を踏襲しており、仮本堂としては大きいものとなっています。



本堂平面図



内陣の欄間彫刻



矢来内の虹梁や臺股

西岸寺の内陣・余間の欄間彫刻は尾州彫物師であった瀬川治助作とされています。「跨ぎ龍」は瀬川家の特徴を示していますが、記録文書や墨書・陰刻などがありますが、推定されます。彫り方の癖から重定と推定されますが、本堂建立時期からすると内陣は父重定、余間は重光の可能性ががあります。

本堂正面

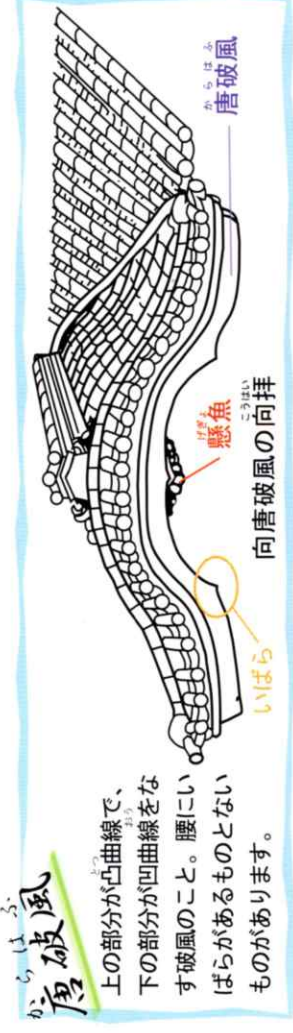
永安寺本堂 (嵯屋町)

寄棟造
よせむね
さんかくわらわさき
構造様式：棧瓦葺
つまいり



本堂正面

また、永安寺には愛知県指定天然記念物の樹齢約300年の「雲龍の松」と呼ばれるクロマツや嘉永元年（1848）の棟札が残る近世の地藏堂が存在します。

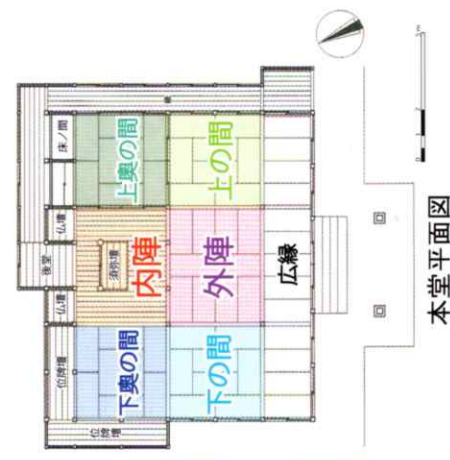


本堂平面図

唐破風
からいふう
上の部分が凸曲線で、下の部分が凹曲線をなす破風のこと。腰にいはらがあるものとなないものがあります。

永安寺は本然山と号し、曹洞宗の寺院です。延宝年間（1673～1680）の創立といわれています。

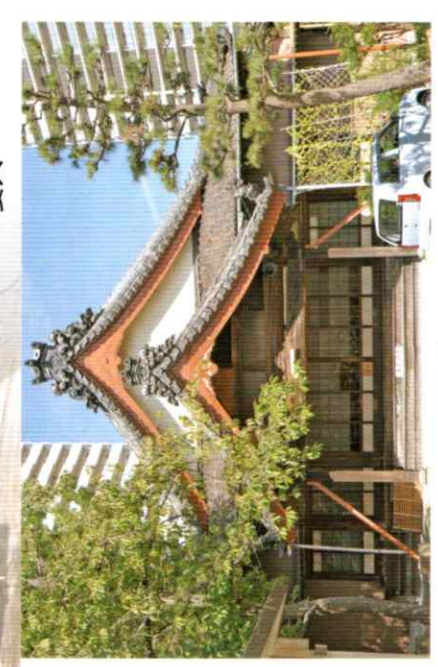
現在の本堂の建立に関しては、上棟記念の吊幕が残されており、昭和14年（1939）11月と記されています。方丈六間取り形式で、米迎柱のみ円柱にしています。空間に建具を用いず柱間を開放する点においては時代の新しさを示していますが、向拝を向唐破風としている点や虹梁・斗拱・臺股・大瓶束爰形付きを用いて華やかになっている点などの意匠には昭和初期の特徴がよく表れています。



本堂平面図

碧海教会本堂 (昭和町)

入母屋造
いりもや
さんかくわらわさき
構造様式：棧瓦葺
つまいり



本堂正面

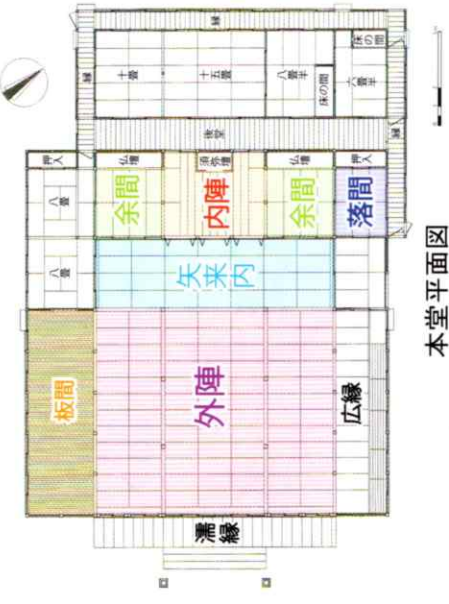
碧海教会は真宗大谷派に属し、明治31年（1898）8月8日に本山直轄の説教場として開かれました。明治24年（1891）には、国鉄（現在のJR）東海道本線安城駅開業に伴う商業発展により、当時の碧海郡長・村井高正によって、理想の人格と精神道徳の養成の場となる説教場の設立が提唱され、明治35年（1902）に現在の堂宇ができました。真宗の一般的な本堂とは異なり、建物の規模は大きく、とくに外陣と矢来内の奥行が深いのが特徴的です。本堂の背後に4室の座敷が並ぶ書院を併設することにも他に類例がなく、真宗寺院の近代説教場の一形式として貴重な遺構といえます。



内観



向拝正面



本堂平面図

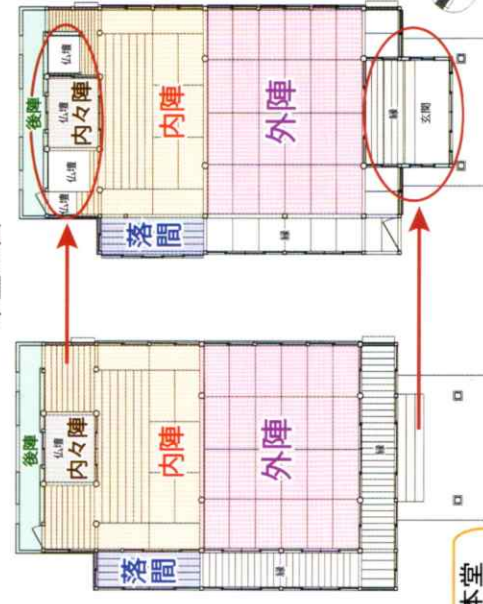
妙教寺本堂 (守瀬器屋町)

入母屋造
いりもや
さんかくわらわさき
構造様式：棧瓦葺
つまいり



本堂正面

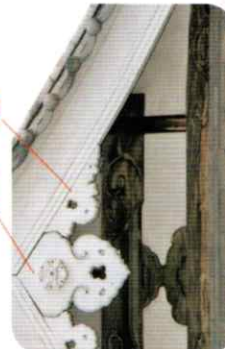
妙教寺は、市内唯一の法華宗寺院です。山号を法喜山といい、法華宗（陣門流）に属します。本堂は昭和32年（1957）の再建といい、2年後の伊勢湾台風では大きな被害を受けたといわれます。外陣・内陣・内々陣からなる仏堂で、側柱以外には円柱を用いていますが、斗拱は使用していません。また、陣境にも建具を用いず、開放しています。日蓮系の一般的な仏堂建築とは形式も異なっています。日蓮宗の法華宗本堂でもあり、本尊の釈迦如来・多宝如来坐像（附厨子）は元龜2年（1571）作の市指定文化財となる大変貴重なものです。



本堂平面図



本堂内の絵様



懸魚と二重虹梁臺股